

対照言語行動学研究会（JACSLA）第 20 回記念大会 研究発表 概要

2022. 10. 8 開催 於 神奈川大学 みなとみらいキャンパス

タイトル	方言に見るいわゆる強調の「が」—長崎県藪路木島方言を中心に—
著者名（所属）	原田走一郎 (長崎大学多文化社会学部)
連絡先 E メール	haradaso@nagasaki-u.ac.jp
論文内容	<p>現代標準日本語や古典語に限らず、諸方言にも助詞「が」は存在する。その「が」について、本発表では、主に以下の 3 点を述べた。</p> <p>①「が」は諸方言において、我々が思っている以上に、“強調”を表す場合が多いのではないか。</p> <p>②「が」が“強調”を表す頻度が諸方言で異なる。</p> <p>③“強調”を表すとしか言えない「が」も方言にはある。</p> <p>①と②については日本語諸方言コーパスを用いた調査に基づいて述べた。以前から、「が」は“強調”の際に生じる助詞であるということが諸方言において指摘されている。そこで、日本語諸方言コーパスの標準語検索で「が」を検索し、方言の主語の標示がどのようになっているか（「が」なのか「の」なのか無助詞なのか、など）をまず調べ、それぞれの述部についてタグ付けした。その結果、「が」以外に主語標示のオプションがある方言においては、「が」で主語が標示された場合の“強調”の割合が、「が」とそれ以外のすべてのオプションを合わせた場合の“強調”の割合より高くなる傾向にあることがわかった。なお、この場合の“強調”は便宜的に形容詞述語文、名詞述語文と、節にかかるものをすべて“強調”とし、動詞述語文を“強調”以外としている。このように、標準語より「が」が“強調”である頻度が高い方言があることがわかった。</p> <p>また、長崎県藪路木島方言には、「ここでも滑った」のように“強調”としか考えられないような「が」も存在する③。本発表では、この「が」は、上に示したような“強調”の頻度が高い「が」を持つ方言において「が」＝“強調”と再解釈された結果、生じたものと考えた。また、「が」とは別の有形の主語標示である「の」が存在する方言にこのような「でが」のような助詞の連続が集中していることについては、有形の標示があることによって「の」＝“主語”かつ「が」＝“強調”と再解釈されやすかった／されやすいのではないかと考えられる。</p> <p>一方で、東京方言においても 5 回に 1 回程度は「が」が“強調”であることが今回のコーパス調査でわかった。そのため、頻度は他の方言よりも低くとも、東京方言においても“強調”の「が」は確かに存在しているということも確認された。そのために、八重山地方の“標準語”において「が」が“強調”と再解釈されたのではないかと考えられる。</p> <p>このように、諸方言のありかたを観察すると、“強調”の「が」は決して周辺的な現象ではなく、むしろ「が」の重要な部分を占めるのではないかと思われる。</p>